

クリスティーネ&ディートマー・ヴェルナー ドイツワイン伝説集（抄訳）

解説・訳註 岩本真理子

ワインを植えさせたボンファティウス

フン族が454年にアッティラ¹に率いられてライン地方に攻めてきた時、彼らはキリスト教の信奉者に対して略奪と暴虐の限りを尽くした。

746年、神に祝福されたドイツの聖者であり、マインツ²の最初の大大司教であるボンファティウス³は、フン族に殺された殉教者たちを顕彰した。彼はアルツァイ⁴近郊にある殉教者たちの受難の場所に、記念として礼拝堂を建てさせ、その礼拝堂を「聖なる血の礼拝堂」と名付けた。さらに彼はこの地がワインの栽培に非常に適していることに気づき、彼の命により、この土地に高貴なブドウが植え付けられた。ここに注がれた貴重な血の思い出として、このブドウ畑はそれ以来「ブルートベルク（血の山）」と呼ばれるようになった。

ベルンカステルのドクター

名高いモーゼルワインのひとつに、「ベルンカステル⁵のドクター」と称するワインがある。なぜこのような風変わりな名前がついたのかについては、次のような話がある。

ある時、トリア⁶の大大司教ボーエムント⁷が悪性の熱病に襲われ、どんな薬も効き目がなかった。とうとう彼はモーゼル河畔ベルンカステルのランツフト城⁸に隠遁することになった。仕事を離れて一人静かに養生すれば、病も癒えるだろうと考えたからである。しかし城に引きこもっ

1 Attila(406頃～453)が実際にライン河を越えたのは451年である。

2 Mainz ラインラント＝ファルツ州の州都で、ドイツ三大司教都市のひとつ。

3 Bonifatius(672/673～754) 「ドイツの使徒」と呼ばれる聖人であり、ドイツのキリスト教化に貢献した。747年にマインツ大大司教に就任。

4 Alzey ラインラント＝ファルツ州のワイン産地。

5 Bernkastel ラインラント＝ファルツ州、モーゼル河畔の町で、対岸のクースと合併して現在はベルンカステル＝クース Bernkastel-Kues。モーゼルワインの産地として名高い。

6 Trier ドイツの三大司教都市のひとつであり、ドイツ最古の都市でもある。

7 ボーエムント Bohemund またはベームント Boemund II . von Saarbrücken(1367年没) は1354～1362年にトリア大大司教を務めた。

8 今もベルンカステルに残る Landshut 城は、11世紀以降トリア大大司教の所有となっていた。

でも、病は離れようとせず、彼はますます衰弱するばかりであった。そこで大司教は家臣に命じ、治療薬をもたらそうという者は誰であれ、目通りを許すように命じた。またそれに加え、誰でもこの熱病を追い払える者には高額の報酬を支払うというお触れを出させた。しかしすぐに誰も来なくなってしまった。なにしろ当時最高の腕前を持つ医者でさえ成果をあげることができなかったのに、いったい誰がお役に立てるといえるのか？そんなわけで、大司教が治癒の望みを捨てたのも無理からぬことであった。

この知らせは、ある老騎士の耳にも届いた。彼は波瀾に満ちた人生を送った後、フンスリュック⁹の城で余生を過ごしていたのである。騎士は叫んだ。「大司教は手の内に妙薬をお持ちなのに、その使い道をご存知ないのだ！このベルンカステルのもよりも良いワインを飲んだことがあるか？これこそが本当のドクターだ、シュボンハイム¹⁰の私闘¹¹の際にわしの命を救ってくださった我が大司教を治して差し上げられないのならば、悪魔がわしをさらっていても構わん！」

彼はすぐに支度をした。辛うじて半分ほど中身の入った樽を馬車に積みこみ、ベルンカステルへと赴いた。到着すると樽を肩に載せ、城へと上がっていった。城の人々は最初は彼を通そうとしなかったが、治療薬を持ってきたのだと告げられると、彼の好きなようにさせた。

大司教はこの訪問に少なからず驚き、挨拶を交わしてから、騎士に訪問の趣きを尋ねた。騎士はポーエムントに答えた。「あなた様が性質^{たち}の悪い病で床に臥されており、医者も手の施しようがないとお聞きしました。そこで私は大司教座の誠実なる封建家臣として、あなた様を治して差し上げるために参りました。」こう言って騎士は樽を指差した。大司教はこの風変わりな薬を飲む決心がなかなかつかなかった。だが彼は心にこう思った。「ほかのどんな薬もこれまで効かなかったのだから、この薬を試してみてもよかろう。」そこで二人は見事な飲みっぷりで杯を傾けた。この素晴らしい飲み物が自分のブドウ山で取れるブドウから出来たものだと聞いた大司教は、この特別な治療法を続けてみた。すると熱は目に見えて下がり始め、数週間後にはすっかりよくなった。

このような奇蹟を成し遂げたワインは、それ以来「ベルンカステルのドクター」と呼ばれるようになったのである。

ブドウ畑の宝物

ディートリンゲン¹²のある女が、彼女の畑と隣の畑の間に延びる畝に白い女が座って、お金の

9 Hunsrück ライン河南西部、モーゼル川とナーエ川の間広がる粘板岩質の丘陵地帯。この地域の粘板岩質の土地には、良質のワイン産地が多い。

10 Sponheim フンスリュック地方の地名であり、神聖ローマ帝国直属のシュボンハイム伯爵領であった。

11 Fehde「私闘」は、中世における個人・家族・部族間の紛争を解決するための戦闘状態を意味する。

12 Dietlingen バーデン地方、ケルテルン (Kelttern) の一地区。

いっぱい詰まった壺を膝の上に置いているという夢を、二晩立て続けに見た。彼女が夫にこの話をすると、彼は「もしまた今夜も繰り返しその夢を見たら、ブドウ畑に行ってみろ」と忠告した。

事実その夜、女は同じ夢を見た。これで三度目だった。そこで彼女は素早く服を着て、ブドウ畑へと急いだ。彼女はそこにやはり白い女がお金を持って座っているのを見た。彼女は一言も口をきかずに、白い女の膝からお金の壺を取り上げ、その壺を持って畝の端まで行った。その時、背後で恐ろしい音が聞こえたが、彼女は振り向きもしなかった。こうして、女はお金を手に入れて無事家に戻ったが、幸せはやってこなかった。というのは、彼女は二日後に死んでしまったからである。

黄金の支柱

17世紀半ばに、ザクセン選帝侯の宮廷都市ドレスデン¹³の近くで、次のような奇妙な出来事があったそうだ。あるブドウ園の地面から、一本の長い支柱が出てきて立っているのをブドウ園の経営者が見つけた。彼は支柱をつかんで引っ張った。彼が急いで引き抜いた時には、支柱はすでに何エレ¹⁴もの長さになっていた。それから彼はこの珍しいものをじっくりと眺めてみた。その時彼は、支柱が純金でできていることに気づいた。そこで彼は、この不思議な支柱の残りをさらに地面から引き抜こうとした。それはうまくいかなかったが彼は満足し、一生豊かに暮らした。

魔法のレモン

ドゥアラハ¹⁵出身の二人姉妹が、ある日の正午、塔の後ろのブドウ山で働いている日雇い人夫たちに食事を運ぼうとしていた。彼女たちが塔の前にあるベンチのところに来ると、そこにはとても美しいレモンが一他の人が語るところによるとマルメロが一たくさんあった。しかし不思議なことに、そのレモンは全て半分に切られていた。それでも、娘の一人はレモンをいくつか取って前掛けに入れた。しかし姉が警告したので、彼女はレモンをまたすべて捨ててしまい、二人は一緒にブドウ山の日雇い人夫たちの所へ行った。二人が男たちに不思議な拾い物のことを話すと、男たちは宝物を見つけるつもりで、あまり離れていなかったベンチへ走って行った。しかしもう彼らはレモンをひとつも見つけることは出来なかった。

13 Dresden ザクセン選帝公国(後のザクセン王国)の都、現在はザクセン州の州都。

14 Elle 腕の長さを基準とした単位で、50～80cm。

15 Durlach バーデン＝ヴュルテンベルク州。バーデンワインの産地で、現在はカールスルーエ Karlsruhe の一地区。

悪魔のつむじ風

フランケンラント¹⁶の年取った小作農が、ある夏の日に分のブドウ山で土を鋤で柔らかにほぐして雑草を抜いていた。ブドウ山のすぐ隣には、広いクローバー畑が広がっていた。そこではちょうど一人の下女が刈り取ったばかりのクローバーを積み上げて、干し草の山を作っていた。ブドウ山の農夫も抜き取った草をきれいにまとめて、二本の道の間に一列に並べていた。農夫が仕事を終えて、パンをぱくつくために腰を下ろそうとしたちょうどその時、一陣のつむじ風が唸りを上げて巻き起こり、干し草をめちゃめちゃにしてしまった。その時下女は「悪魔になぐられちまえ！」と呪いの声を上げた。ところがこの言葉を口にしたとたんに、突風が下女を空に吹き上げ、運び去ってしまった。農夫がまだ下女を見つめているうちに、つむじ風が彼の朝食のパンをもさらっていった。しばらくしてから下女の上履きは地面に落ちてきたが、娘自身は二度と再び姿を現すことはなかった。

貴腐ワインの誕生

1716年にヨハニスベルク¹⁷がフルダ¹⁸の大修道院に売却された時、のちに城が建設されるまでそこに留まっていた修道士たちの苦難の時代が始まった。というのも、フルダの領主大修道院長コンスタンティン・フォン・ブトラー¹⁹は、いつもブドウ栽培とワイン貯蔵庫を厳しく管理する視察官を派遣してくるので、修道士たちはうんざりしてしまったのだ。

ブドウの出来が非常に良かった年のこと、修道士たちは皆、収穫の恵みを運び入れるのに手一杯だった。ところが不運なことに、いくつかの地所でブドウの摘み取りをまだ始められないほど早い時期に、その年の最初の霜が降りてしまった。さらに不運なことに、その時ちょうど、またフルダから視察官が来るという知らせが届いた。さあ困った。しかし何もやましいことはしていないのだと考えて— というのも修道士たちは朝早くから夜遅くまで働いていたのだから— 視察官をもう穫り入れの済んだ地所だけに案内しようとして衆議一決した。ところが視察官は、まるで悪魔が首根っこに座ってでもいるかのように、凍りかけているブドウの房がまだたっぶり下がっている地所にばかり足を向けるのだった。それから視察官は修道士たちを集合させ、その前で大修道院長を厳しく叱り、怠け者めらがとぶつぶつ言いさえた。最悪なのは、今すぐ穫り入れを再

16 Frankland バイエルン州のフランケン地方とバーデン＝ヴュルテンベルク州のバーディッシェス・フランケンラントを意味する。

17 Johannisberg 1130年、ラインガウ地方のガイゼンハイム Geisenheim に洗礼者ヨハネを祀る修道院が設立された。1716年にフルダ大修道院の所有となり、1718年からヨハニスベルク城が建てられた。現在でも上質のワインを産する畑を持つことで有名。

18 Fulda ヘッセン州。744年創建の修道院を中心として栄えた町。

19 Konstantin von Buttlar(1679～1726) 1714年にフルダ領主大修道院長に就任した。

開せよと視察官が命じたことだった。さらに彼は、修道院では今まだ枝に下がっているブドウで作ったワインしか来年は飲んでではならん、と言いつ渡した。

視察官が立ち去ったあと、修道士たちと修道院の下男たちが何と言ったかは伝わっていない。しかし翌年、このワインが大修道院長に初めて供された時、一口飲んだ彼の顔はまさしく光り輝いた。彼に続いてそのワインの味見をした修道士たちは、辛い労働と凍えた指とを補って余りある奇蹟が起きたのだ、と考えた。今までに飲んだワインの中でこれが最も上等のワインだということで、皆の意見は一致した。

次の年には、いくつかの地所でわざと霜が降りるまでブドウを実らせたままにしておいた。そして奇蹟だと思われていたことが再び起きたとき、「貴腐ワイン」²⁰の秘密が明らかになったのである。

薄情さに対する罰

主がまだ地上を歩いてまわられていた頃、ある時お供のペトルスと共にボーデン湖畔のリンダウ²¹にお忍びでやって来た。ところがお二人は宿を提供してもらうどころか、心無い市民たちによって追い立てられてしまった。街の門の前で彼らは一人の日雇い人夫と出会ったが、彼は喜んで二人を泊ませ、自分と妻が持っているものを二人と分け合った。主はお礼として、彼らに何か望みを言うことを許した。そこで二人はささやかな庭と小さな耕地が欲しいと願った。翌朝、彼らはその願いをはるかに超えるものが与えられたことを知った。

このことをリンダウの人たちが聞きつけて、あなた様がどなたであるかを知っていたならば、喜んで一晩泊めてさし上げたのに、と伝言を送った。すると主はおとなしく道を引き返し、リンダウの人々のもてなしを受けた。ペトルスはこれを快く思わなかったが、食事の後で予想通りの事態になった時はなおさらだった。リンダウの人々は主に贈りもののおねだりをしたのだ。そうでなくともすでに何でも持っていたのに、ワイン用のブドウが欲しいと、彼らは一心に願ったのである。主は彼らの願いを聞き届けられた。

先へと道をたどりながら、ペトルスは尋ねずにはいられなかった。「主よ、なぜあなた様はあのように人をうらやましがる者たちのところにブドウが育つようになされたのですか?」「落ち

20 原語では *Edelfäule*。貴腐菌がついたブドウの粒を選りすぐって作るワインのことで、現在のランクではベーレンアウスレーゼ、トロッケンベーレンアウスレーゼにあたるが、ここで描写されているのは、氷結したブドウの実を用いて作るアイスヴァインのことと思われる。

21 *Lindau* バイエルン州。ボーデン湖はドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州、バイエルン州、オーストリア、スイスに面しており、湖畔にはメーアスブルク *Meersburg* などバーデンワインを産する土地がいくつかあるが、その東に位置するリンダウは、今はワイン生産地であるが、以前はワイン生産地には含まれていなかったようである。

着きなさい、ペトルス」と神は答えて言われた。「それで楽しめるとは限らないだろうよ。」なにしろ、リンダウのワインは悪魔でさえも飲めなかったというシレジア²²のワインと甲乙つけがたいほど酸っぱいと言われているのである。

カール大帝とリュードスハイムのブドウ山

昔、カール大帝²³が冬のインゲルハイム²⁴に滞在していた時、厳しい北風がライン河の上を吹いていた。その上、あたり一面深い雪で覆われていた。ところが皇帝はリュードスハイム²⁵近郊の南向きに位置する斜面には雪が積もっておらず、明るい日差しを浴びて輝いているのを見て、いぶかしく思った。何度かこういう光景を見て、皇帝は「あの丘にブドウを植えたらどんなにすばらしいだろう！」と考えた。

そこで皇帝は、春になると何人かの厩係^{うまや}をオルレアン²⁶に使いに出し、そこからブドウの苗木を持ってこさせた。そのブドウをすぐにリュードスハイムの山の開墾した斜面に植え付けさせた。この目論見は幸運の星のもとにあった。というのは、間もなく苗木はすくすくと芽を伸ばし、3年半後には最初のリュードスハイム産のワインの原液が皇帝に献上されたのである。

ワインが樽の中で熟成するとすぐに、カール大帝はインゲルハイムで大規模なワインの利き酒会を行った。人々はヴェスヴィオ産やギリシャ産の燃えるように強い²⁷ワインをおいしく飲み、ブルゴーニュワインやモーゼルワインも賞賛を得た。しかし何とんでも、最高の賞を得たのはリュードスハイムのワインだった。というのはそのワインは他の産地のワインと同じように強かったが、香りの豊かさはそれら全てに勝っていたからだ。本物のリュードスハイムのワインは、今でもそのとおりである。

そのとき以来、良いワインができる年には、ブドウの花が咲く時期になるとカール大帝がアーヘンの霊廟²⁸を抜け出して、ライン河の岸辺に沿って悠然と歩みを進め、ブドウの房を祝福してまわるのだと、ワイン農家はみんな一も二もなく信じきっている。

22 Schlesien 現在はポーランド領であるが、14世紀以来神聖ローマ帝国に所属し、ドイツ文化圏内であった。

23 Karl der Große(742～814) フランク王であり、800年にローマ教皇レオ3世から「西ローマ皇帝」として帝冠を授けられ、のちの神聖ローマ帝国の礎を築いた。

24 Ingelheim ラインラント＝ファルツ州。皇帝の居城の遺構が現存する。カール大帝は774年に初めてインゲルハイムに滞在している。

25 Rudesheim ヘッセン州。インゲルハイムよりやや下流で、ライン河をはさんで対岸にある。

26 Orléans フランス中部、ロワール川に面した町。

27 原文では feurig という形容詞が使われている。伊藤真人著『新ドイツワイン』（柴田書店、1984年刊行）によれば、「アルコール分に富み、力強い、見た目にも輝かしいワインを指す言葉」であり、「赤ワインに対してのみ使われる」形容詞である。同書190ページ参照。

28 カール大帝の遺骸はドイツ、ベルギー、オランダの国境に近いアーヘン Aachen の大聖堂に安置されている。

祝祭日の労働が罰せられた話

バーデン地方にヴァインガルテン²⁹という土地がある。その地のトゥルムベルクには、毎年復活祭日曜日の昼の11時と12時の間に男の幽霊が出る。彼はかつて自分のものであったブドウ畑に現われ、ブドウの枝の切りくずを拾っている。これは彼が生前、復活祭に全く同じことをやって、祝日を冒涇したことに対する罰なのである。

ある時、彼が幽霊だということを知らない少年が、祝日なのに働くのかと彼に問いかけたことがあった。すると幽霊は片手一杯分の枝の切りくずを少年に投げつけたが、それはすべて火であった。

ワイン祭りの終焉

グーベン³⁰のブドウ園経営者たちは、1536年まで毎年春と秋の始まりにブドウ畑の小道を行列で練り歩く祭りを行っていた。司祭たちが先頭を歩き、行列の人々はワインの神とワイン作りの守護者である皇帝バルパロッサ³¹を称える歌を歌った。しかしグーベンの人々がこの異教的な慣わしを取り止めた時、悪魔はひどく腹を立てて、1536年の10月13日に町に大火をお見舞いした。そのため、とりわけ気の弱い人たちは、昔の慣わしをこっそり行い続けたと言われている。

石になった乙女

昔、オーバーリュッツィンゲン³²に大層裕福な貴族がいた。彼には家族がなく、気にかけてやるべき相手もいなかった。その上彼は無鉄砲で自堕落な生活を送っていた。だから馬に乗って仲間と狩をする時も、領地の農民が耕した畑を踏み荒らしても、何とも思わなかった。それどころか農民たちは、この貴族が享楽に使う金を得るために、毎日辛い仕事をしなければならなかった。

その当時、ヘルヒェンベルクの南側に農場があった。貴族はその農場の美しい娘に会うためによく馬で出かけていった。農場は近くの修道院のものだった。貴族はその修道士たちと共同でブドウ畑を所有していたが、貴族と修道士たちは収穫の取り分をめぐる常激しく争っており、修道士たちは彼にかなり痛い目に会わされていた。

10月のある日、ブドウの収穫が終わってすぐのことだったが、修道院に引き渡されるはずの取り分を定めるために、一人の修道士が農場主のところに来て来た。農場主の娘と貴族の関係

29 Weingarten 「ワイン園」を意味する地名。バーデン＝ヴュルテンベルク州、バーデン地方にあり、前述のディートリンゲンやドゥアラハにも近い。

30 Guben ベルリンから東におよそ100km、ブランデンブルク州の東端で、ポーランドとの国境に位置する。

31 Barbarossa 「赤ひげ」を意味するイタリア語で、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世 Friedrich I (1122～1190)の渾名。バルパロッサはカール大帝と並んで民衆に人気があり、ドイツの伝説には頻りに登場する。

32 Oberlützingen ラインラント＝ファルツ州、アーヴァイラー郡の小村。

は修道士たちにも知れ渡っていたので、話のついでに修道士は、そのような関係があろうとも、修道院の趣旨にかなうブドウの収穫全体での取り分に影響を与えることはできないぞと農場主を責めた。また修道士は農場主に、お前の娘はあの罰当たりな貴族とは永遠に手を切らなければならんぞと警告もした。

ところが彼らがまだ話し合っている間に、^{くだん}件の貴族が馬に乗って大急ぎでこちらへやってくるのが見えた。修道士は身の危険を感じた。逃げ出せるような道もなかったから、なおさらのことだった。そこで修道士は地下貯蔵庫へ駆け降りて、ワイン樽の陰に身を潜めた。

しかし娘は貴族にすっかりほれ込んでいたので、修道士の警告など聞く耳を持たなかったし、修道士によって自尊心を傷つけられたと感じていた。彼女は恋人に今起きた出来事を話し、それどころか修道士の隠れ場所まで教えた。怒り狂った貴族は地下貯蔵庫へ駆け降り、身を守る術もない修道士に飛びかかった。修道士は、後生だから助けてくれと懇願したが、彼が苦しむ様子を見て娘はおもしろがっていた。どんなに慈悲を願っても何の役にも立たないと悟った修道士は、貴族と娘に対して呪いの言葉を投げた。彼は手を天に向けて高く挙げ、「お前たちの心は石であるから、二人とも石になるがよい！ お前たちは二度と互いに近づくことはできぬ！」と叫んだ。

二人はその言葉を笑い、^{よこしま}邪な貴族は修道士を絞め殺した。すると突然辺り一帯の空が暗くなり、恐ろしい嵐がやって来た。嵐が収まってみると、修道士の呪いは成就していた。娘は岩になって、山の南の斜面に聳え立っていた。貴族も同じように灰色の岩になり、山の東側に立っていた。この災難ののち、娘の両親も長くは生きていなかった。二人は悪性の病でその後間もなく死んだのである。それ以来ブドウ栽培もうまく行かないようになり、まもなくワイン作りは廃れてしまったという。

ラインスブルクのワイン

アルンシュタット地方³³の温暖な貝殻石灰岩の山では、昔はブドウがたくさん栽培されていた。今日でもいくつかの耕作地は「ブドウ山」という名前で呼ばれており、かつてのブドウ栽培を偲ばせている。またラインスブルク³⁴城の地下貯蔵庫は土に埋まっているが、そこには土地のブドウを絞って造った途轍もない分量のワインが貯蔵されていると伝えられている。いつの日か山が口を開き、岩が砕ける時がくれば、ワインはアルンシュタットを水浸しにし、テューリンゲン州全体がワインで覆われることになるだろう。

33 Arnstadt テューリンゲン州、エアフルトの南にあたる地域。

34 Reinsburg 13世紀に建設された城であるが、現在は廃墟。ラインスブルクはこの城が建っていた山の名前でもある。

カーラ近郊のドーレンシュタイン

ザーレ川の右岸、カーラ市³⁵の対岸にドーレンシュタインという標高 532 メートルの山がある。この山は何度も山崩れを起こしており、1780 年に崩れた際には、ドーレンシュタインの斜面にあったブドウ畑が土砂で完全に埋まり、それ以来ブドウ栽培はここでは行われなくなった。

この山の山崩れについては、次のような伝説がある。

昔、ドーレンシュタインには城があり、城の住人たちは盗みを生業としていた。彼らは通りかかった商人たちを襲うだけでなく、高い身代金をゆすり取るために、商人たちを地下牢に閉じ込めた。また時折、周辺の集落で略奪も行っていた。ある時盗賊たちは、一人の司祭が終油の儀式の道具を携えて死に臨んでいる信者のもとへ急いでいるところを襲ったのだが、この時彼らの命運は尽きようとしていた。盗賊たちは神聖な道具を奪っただけでなく、年老いた司祭を責め苛んだ。

その時司祭は、盗賊どもに対して厳しい呪いの言葉を吐いた。盗賊たちは笑い飛ばしていたが、夕方になると、脅かすような黒雲が押し寄せてきたのである。恐ろしい暴風雨が荒れ狂い始めた。夜が明けた時、ドーレンシュタインの城は跡形もなく消え失せていた。大地が開いて、住人もろとも城を飲み込んだのである。今でもまだ、城はかつての住人と共に呪われたまま山の中に埋もれている。ドーレンシュタインが完全にザーレ川の中に崩れ落ちた時に初めて、城は再び姿を現わすと言われている。

貯蔵庫管理人の幽霊

16 世紀初頭のマインツの大司教はウーリエル・フォン・ゲミングゲン³⁶であった。彼は徳の高さで際立った人物であったが、また大変なかんしゃく持ちでもあった。そのせいで彼がどのような悪事をしてかしたかを、以下の伝説が物語っている。

ある時大司教はアシャッフエンブルク³⁷で、大司教専用の貯蔵庫からワインを盗んでいた貯蔵庫管理人を取り押さえた。その時、例のかんしゃくでかっとなつて、大司教は手元にあった桶作り用の槌を握り、それで管理人を散々打ちのめした。すると管理人は床に倒れて死んでしまった。大司教はこの行為をひどく後悔したが、しかし起きてしまったことをもう元に戻すことはできなかった。それでも彼は、少なくとも罪に対する償いをしたかった。

そこで大司教は、自分が死んだという知らせを広めた。同時に、殺された貯蔵庫管理人の遺体

35 Kahla テューリンゲン州。ワインの産地としてはザーレ・ウンストルート地域にあたる。

36 Uriel von Gemmingen (1468 ~ 1514) 1508 年から 1514 年までマインツの大司教であった。比較的若いうちに急病で亡くなったため、このような伝説が生まれたと思われる。

37 Aschaffenburg バイエレン州。マインツ大司教の第二居住地で、現在も大司教の居城が残る。

が立派な衣装を着せられて埋葬されるよう取り計らった。大司教自身は他郷のカルトウジア会修道院で、絶え間ない贖罪の祈りを捧げることで余生を過ごした。

しかし貯蔵庫管理人はこのような事情で、告解もせず赦免も与えられないまま埋葬されたので、彼の魂はその後アシャッフエンブルクの城に化けて出るようになった。古い城が取り壊され、新しい城が建てられてからは、幽霊は新しい城の庭に姿を現わした。幽霊話は何かのペテンではないかと考えたカール大公³⁸は、幽霊が最もよく目撃される地下貯蔵庫の入り口に番兵を置いた。しかし番兵交替の際に、番兵が気を失って半死半生の態で発見されることが相次いだので、番兵を置くことは結局取りやめになった。

祝日の労働を罰された管理人

アシャッフエンブルクのシェーンボルン館³⁹の、フライホーフに隣り合った建物の地下室には、以前は大きなワインの貯蔵庫があった。この貯蔵庫を監督していた管理人は大変仕事熱心で、仕事に熱中すると他のことは全て忘れるほどだった。彼はよく夜遅くまで樽を叩いて回っていた。

彼は神聖なクリスマスの日でさえ仕事を休もうとしなかったことがあった。クリスマスの深夜ミサにでかける時刻にも、またミサから戻る時刻にも、彼が貯蔵庫をうろつきまわって樽を叩いている音が聞こえた。彼は死後いつも、教会の鐘がクリスマス深夜ミサを告げるために鳴ると、神聖な祝祭を冒涇した罰として樽を叩き始める。それはいつも深夜ミサが終わるまで続いたのである。

ブレーメン市庁舎の酒蔵の魔女

この国の北部にいたある農夫が、冬に備えて万全の準備をしたので、倉庫も地下貯蔵庫も十分満たされていた。ところが、世の中とはこういうものだが、よく鼻の利く老いぼれ魔女がこの宝物の匂いを嗅ぎつけ、仲間の魔女たちと一緒に農夫のところに行こうと企んだ。そしてその考えを実行したのだ！魔女たちは夜こっそりと農夫の家にやってきて、農夫がせっかく蓄えておいたうちの最上のものを食べてしまった。しかし、魔女が来たせいで馬が騒いだので、騒ぎの原因を見定めようと下男が寝床から起きてきた。彼は台所の扉のひび割れから中をのぞいて、ご馳走を食べている魔女に気づいたが、魔女たちはちょうど食事を終えるところだった。魔女たちは今度はおいしい飲物を欲しがった。しかしこの家にはワインは一滴もなかった。すると魔女の一人が

38 Karl Theodor von Dalberg (1744 ~ 1817) のことと思われる。カールは 1802 年から 1804 年までマインツ大司教在職、アシャッフエンブルク公とフランクフルト大公を兼任していた。

39 Schönborner Hof アシャッフエンブルクに現存するシェーンボルン家の館で、現在は自然博物館として利用されている。またフライホーフ Freihof とは、貴族の住居などのうち税金を免除された建物を意味する言葉である。

言った。「おいでよ、ブレーメン⁴⁰市庁舎の酒蔵に行こうじゃないか。あそこにはワインがたっぷりあるさ、逸品揃いだよ！」他の魔女たちも了解すると、一人が軟膏の入った箱をポケットから取り出した。すぐに全員が体に軟膏を塗り、それから叫んだ。

「茂みを越えて木を越えて
小川を越えて川越えて
ブレーメンのワイン蔵の中へ！」

すると魔女たちは突然姿を消した。

その時になって下男は台所に入る勇気が出てきた。魔女が置いていった箱に気がつくのと、彼はその軟膏を少し体に塗ってみた。しかし彼は呪文を正確に聞いていなかったのも、こんな風に叫んだ。

「茂みをくぐって木をくぐって
小川をくぐって川くぐって
ブレーメンのワイン蔵まで！」

すると下男はものすごい勢いで引っさらわれた。しかし呪文が間違っていたので、ブレーメンのマルクト広場に着き、市庁舎の酒蔵の閉ざされた扉の前に立った時には、服がずぶぬれでぼろぼろに引き裂かれていただけでなく、彼自身も体中にさんざん引っかき傷を受けていた。ワインを飲もうという気もすっかりうせていたし、魔女の軟膏には生涯二度と触りもしなかった。

しかし翌朝、貯蔵庫監督が持ち場にやって来た時、最上のワインの樽が一滴残さずのみ干されているのを見て仰天した。その樽は有名なローゼケラー⁴¹のものだったという人もいる。厳しい取調べが行われたが、犯人を突き止めることはできなかった。

40 Bremen ブレーメン特別州。ブレーメンのようなドイツ北部の町ではワインは生産されない。しかしブレーメンやリュubeck Lübeck のようなハンザ都市では、ドイツ各地やフランスなどから輸入したワインを大量に保管しており、リュubeck ではフランスのボルドーワインをリュubeck の貯蔵庫でさらに熟成させて品質を向上させるという手法が、今でも用いられている。

41 ブレーメン市庁舎貯蔵庫に現存するローゼ・ワイン Rose Wein. 1653年製、ドイツ最古のワインで、樽の真上の天井にバラの絵が描かれていることからローゼ・ワインと呼ばれる。ブレーメン市長あるいは貯蔵庫監督(ケラー・マイスター)に新たに就任した人のみが、わずかな分量を飲むことを許される。谷克二著「北ドイツ中世ハンザ都市物語」(日経BP社、2003年改訂版刊行)78、82ページ参照。

混じり物の味

エーベルバッハ⁴²の修道士たちのワインは特別なものだったに違いないということは、多くの伝承となって残っている。その修道士たちはいつも上等なワインをたしなんでいるので、ワインの利き酒の能力も特別だったと噂されていた。

ある時、ワイン貯蔵庫監督の修道士が、最高級のシュタインベルガー・ワイン⁴³の小樽を試飲した。ワインは熟成しており、しっかりとしたコクがあって素晴らしい味だった。しかし貯蔵庫監督の修道士は、ワインに何か不快な風味が混じっていることに気づいた。その正体を突き止めようと、彼は何度も味見をした。ついに彼は風味の正体を突き止めたと思った。このワインはかすかに革の味がする。

そこで彼は、修道院では彼に次いで優れた味覚を持っていると評判の、料理人頭の修道士を呼んだ。料理人頭がやってくると、貯蔵庫監督修道士はこの素晴らしいワインをさかずき一杯味見してみるように促した。料理人頭は一口一口味わい、一口ごとにゆっくり噛むようにして利き酒をしてからこう言った。「このワインは何とも素晴らしい。しかしほんの少し鉄の風味が混じっているな。」貯蔵庫監督はびっくりして相手を見て、問いただした。「どうしてまた鉄の風味などと？これは革の風味じゃないか！」

そこで二人はもう一度味見をした。二人とも相手のとんでもない意見には首を振るばかりだった。意見がどうしても一致しなかったので、二人は何度も何度も味見をしなければならなかった。それでとうとうある日、小樽は空になってしまった。貯蔵庫監督は最後の一滴まで出してしまうと、樽を高く持ち上げた、その時、小樽の中で何かがカラカラと音を立てた。彼が注ぎ口を下に向けると、革紐がついた小さな鍵が落ちてきた。それを見て二人の修道士は互いの肩を叩き合せて、心から大笑いした。結局二人とも正しかったわけだ。二人はその日のうちに鍵と革紐を修道院の庭に埋めた。もう二度とワイン樽の中に紛れ込まないように。

ドクトル・ファウストの樽乗り

350年以上も前のこと、悪魔の同盟者ドクトル・ファウスト⁴⁴が学生数人と共にヴィッテンベ

42 Kloster Eberbach 12世紀創建のシトー派会修道院。早くからワインの生産で有名であった。現在はヘッセン州立ワイン販売所となっている。

43 シュタインベルク Steinberg という名の畑で収穫されたブドウから作られたワイン。エーベルバッハ修道院の近くにあり、現在でも高級ワインを生み出す畑として知られている。

44 Johann Faust(1480頃?～1540頃) 伝説的な錬金術師として名高い。1539年の大晦日にドイツ南西部シュタウフェン Staufen の旅籠で爆死したと伝えられる。彼の死後まもなく、ファウストと悪魔との契約をめぐる伝説が広まり、民衆本や人形劇の題材となった。

ルク⁴⁵からライプツィヒ⁴⁶にやってきた。ちょうど見本市が始まっていたので、彼らは大学だけでなく、見本市の店も見物した。町を歩いていると、一軒のワイン貯蔵庫の前を通りかかった。大勢の運送人や白衣たち（当時下僕はそう呼ばれていた）が16か18アイマー⁴⁷の樽を貯蔵庫から運び出そうと苦心していたが、どうにもうまくいかなかった。ドクトル・ファウストは彼らに近づき、こう言った。「何をもたもたしているんだ！全く不器用なやつらだ、こんな樽一人でだって貯蔵庫から運び出せるぞ。」

運送人たちはこれを聞いて当然むっとしたし、目の前にいるのが何者だか知らないで、ファウストに口汚く言い返した。この言葉の応酬は亭主が来るまで続いた。何を争っているのかを聞くと、亭主はファウストとその他のものたちに言った。「いいだろう！お前たちのうち誰でも一人で樽を運び出せたら、樽はそいつにやろう。」

ファウストはこの言葉を待っていたのだ。彼はすぐに貯蔵庫に降りると、まるで馬に乗るように樽にまたがった。それから樽を走らせてさっさと貯蔵庫から出てきたので、みんなあっけに取られてしまった。亭主もびっくり仰天した。そんなことが可能だとは思っても見なかったのだ。しかし彼は約束を守り、満杯の樽をファウストに進呈した。

彼はこの樽を仲間に気前よく振舞ったので、仲間はさらに友達を招待した。このようにして彼らは楽しく過ごし、ライプツィヒでの幸運を賞賛したのである。

良いワインは静かに寝かすべし

良いワインというものは静かに寝かせることで熟成するものだ。だからワイン貯蔵庫では不要な音は一切避けなければならない。とりわけ、ワインが入っている樽を叩くことは許されない。ウンストルート⁴⁸にいたという樽職人—フライブルク⁴⁹だという人もいるが—これをばかげたことだと考え、いつも注意されていたにもかかわらず、樽を何度も叩くことをやめなかった。というのも、こうすれば樽いっぱいに入っているか、あとどれくらいワインが残っているのかが一番よくわかると考えたからである。しかしこのようにしてうるさい思いをさせたワインがすべて、悪魔でさえも飲めないほど酸っぱくなっていることを知った時の彼の驚きはいかばかりであったろう。そこで彼もその後は昔からの言い伝えを守り、数年後には彼の貯蔵庫でよいワインを作れるようになった。

45 Wittenberg ザクセン＝アンハルト州。ルターによる宗教改革発端の街として有名。

46 Leipzig ザクセン州。大学は1409年創立。また、12世紀から見本市が年に2回開かれていた。

47 Eimer 60～80リットルを表す単位。

48 Unstrut エルベ川 Elbe の支流であるザーレ川 Saale の支流。

49 Freyburg ザクセン州、ウンストルート川沿いの町。

ヴィニンゲンのワインの魔女

ゴンドルフとヴィニンゲン⁵⁰の間の美しいモーゼル溪谷は、昔は「坊さんの国」と呼ばれていた。というのも、数多くの修道院や宗教財団や高位聖職者たちがこの土地にワイン畑を所有していたからである。だがそれにもかかわらず、あるいはそれゆえに、なのかもしれないが、この土地にはいかかわしい風評があった。大勢の魔女や妖術師がここで悪魔と会っていたと言われていたからだ。とりわけディーブリッヒャー山⁵¹はモーゼル地方のブロッケン山⁵²とも呼ばれていた。

ヴィニンゲンのワインの魔女たちは、やることに特にあくどかった。いくらしっかりと地下貯蔵庫に鍵をかけても、ワインの魔女たちがおいしいワインを味見するのを防ぐことはできなかった。魔女たちは味見の際に、注ぎ口を元通り閉めることや栓の穴をちゃんと塞いでおくのをよく忘れるので、ワインが流れ出してしまうのだ。また貯蔵庫の中で樽のたがや樽の板がゆるんだりした時も、ヴィニンゲンのワインの魔女がやってきて一杯飲んだからだと考えられていた。

ワインのとりこになった樽職人

ヴェルツブルク⁵³の宮廷ワイン貯蔵庫で、大樽第一号がすばらしいシュタインワイン⁵⁴ 680 アイマーと 24 マース⁵⁵で初めて一杯に満たされた時、この樽を作った飲兵衛の樽職人は悪魔に魂を売り渡した。彼はそれと引き換えに、この樽からワインを注ぎ出す時と樽にワインを入れる時に、いつでもシュタインワインを飲んで酔うことができるように願ったのだ。そして彼の願いはかなえられた。樽や器にワインを満たすのはいつでも彼自身でなければならなかった。しかしある日、またしても一杯飲んで酔っ払った時に、悪魔が彼を階段の上から突き落としたので、首の骨を折ってしまった。

それ以後、ワインを樽から注ぎだしたり樽をワインで満たしたりするたびに、作業している樽職人は意地汚くちびちびと飲んでいる音を耳にする。これは、あの死んだ樽職人の魂がまたいつものように一杯やっているのだと言われている。

50 Gondorf, Winingen ともにラインラント＝ファルツ州、モーゼル河畔のワイン生産地。

51 Dieblich-Berg ヴィニンゲンとゴンドルフの間にある町ディーブリッヒ Dieblich の一地区。

52 Brocken ドイツ中部、ハルツ山脈 Harz の最高峰 (1142m) で、毎年 4 月 30 日深夜に魔女と悪魔がこの山で大宴会を開くという「ヴァルブルギスの夜」の伝説で名高い。

53 Würzburg バイエルン州。フランケン地方の中心都市で、かつてはヴェルツブルク司教領の中心として栄えた。

54 Steinwein ヴェルツブルガー・シュタインという名の畑で作られたワイン。

55 Maß 1～2 リットルにあたる。

ワイン泥棒への罰

昔、ヴュルツブルクのビュルガーシュピタール⁵⁶では、ある決まった日の夜になると地下貯蔵庫の扉を激しくノックする音が聞こえた。毎回ノックの後で地下貯蔵庫から幽霊が現れ、腕にワインのビンを一本抱えて、小路をくまなく歩き回るのだった。

言い伝えによると、これは施療院の昔の管理人であるという。彼は財団から何百本ものボックスボイテル⁵⁷を着服した。その罰として、彼は死んだ後も長いこと化けて出なければならなかったのである。

亡者のワインの代価

ある時ベルネック⁵⁸の牧師の家に陽気な仲間が集まり、夜遅くまで飲んでいて、ワインも残り少なくなり、ロウソクも燃えてすっかり短くなっていて、夜警がもう 11 時を告げていたが、牧師の客たちは宴をお開きにしたくはなかった。

そこで牧師は小間使いを呼びつけ、ワインが無くなってしまったから、山の上の古い城で運を試してこいと言った。「あそこでは毎晩幽霊どもが酒盛りをしているんだから、ワインが何本か減ったって、あいつらはきっと困りはしないさ。」それを聞いた小間使いはびっくりして、主人を怪訝な顔で見つめた。しかし主人は大真面目で同じことを繰り返して、ヴァレンローデン⁵⁹へ登って行けと命じた。そこで小間使いは出かけることにした。

小間使いが城の近くまで来ると、彼女の目の前でつむじ風が勢いよく扉を開けた。怖くなった娘は膝を震わせながら中に入った。ようやく大きな広間に着いてみると、死んだ騎士たちが大勢で饗宴の席に集まっているのが見えた。騎士たちの顔色は灰色で、酒盃はしゃれこうべだということに気がついて、彼女は震え上がった。小間使いが広間に入ると、食事をしていた騎士の一人が立ち上がり、何の用だと尋ねた。唇を震わせながら、彼女は用向きを伝えた。すると一人の騎士がジョッキを手にとり、ワインを満たしてから娘に渡してこう言った。「お前の純真さに免じて許してやろう。罪はお前の主人が負うのだ！だが命が惜しかったら、二度とここに来るのではないぞ！」

娘は素早くジョッキをつかむと、大急ぎで家へ帰った。牧師館に戻ると、テーブルにジョッキ

56 正式には *Bürgerspital zum Heiligen Geist* で、「聖霊施療院」を意味する。施療院ではワインやビールを製造することが多かった。ヴュルツブルクでは現在もビュルガーシュピタールとユリウスシュピタール *Juliusspital* が、施療院付属ワイナリーとして有名である。

57 *Bocksbeutel* 「山羊の袋」を意味する言葉で、球形が平たく押しつぶされたような形の、フランケンワイン独特のボトルを指す。

58 バイエレン州のバート・ベルネック *Bad Berneck*。

59 ベルネックにはヴァレンローデ *Wallenrode* 家の城の廃墟がいくつか残っている。

を置いて「もう二度とあの古いお城には行かないわよ！」と言った。しかし客たちは娘の言葉なんぞ気にも留めず、馬鹿にして笑った。それでも彼らはすばらしい亡者のワインをいかにもうまそうに飲んだ。だが突然ものすごい轟音が響き、嵐が荒れ狂い、目を突き刺すような稲妻が部屋を照らした。客たちは恐れおののきながらこの不気味な場所から出て行った。そして翌朝、空が白みかかったころ、この家の主人が空になったワインの器の前で死んでいるのが見つかった。

大ヘルマンズベルク山の古いワインについて

ある年の大晦日の晩、オーバーシェーナウ⁶⁰の居酒屋に何人かのお客が集まり、夜も更けたころには宿の亭主も一緒になって、魔法をかけられた室について話していた。とうとう彼らは、大ヘルマンズベルク⁶¹の隠された地下貯蔵庫にまだたくさん残っているという噂のある、うんと古いワインを何本か飲んでみたいものだと思いついた。そうすれば、あの山の上に住む魔法をかけられた者たちのために「新年おめでとう」と乾杯することができるじゃないかと考えたからだ。亭主は笑って、試してみるのも悪くないな、と言った。そこでかまどの後ろの糸車の脇で眠っていた下女を起こし、「大ヘルマンズベルク山に登って、一番古くて一番旨いワインを一本取って来い！」と言った。まだ半分寝ぼけていた下女は、普段から少しぼんやりした娘だったが、すぐに家から出て行った。亭主とお客たちは共に楽しい語らいを続け、下女が家から出て行ったことなどとっくに忘れていた。そこへ下女が戻って、食堂へ入ってきたが、ひどくほこりまみれの巨大なビンテーブルの上に置いて、みんなを驚かせた。

もちろんみんなは下女がどこに行ってきたのか、またこれはどういうビンなのかを知りたがった。すると彼女は亭主に向かって「だってヘルマンズベルクに登ってビンを取って来いと言ったでしょう。その通りにしただけよ！」しかしどうやってそのビンを手に入れたのか、あるいは誰がくれたのかは、彼女には説明できなかった。男たちは最初のうちはお互い顔を見合わせていたが、不安に打ち克ってワインの味見をしてみた。彼らが言うには、こんな火のように強いワインはこれまで誰も飲んだことがないということだった。

オーメスの農夫たちがワインを手に入れた話

今ではもうかなり昔の話だが、オーバーヘッセンのオーメス⁶²で、何人かの農夫たちが居酒屋と一緒に座っていた。みんな陽気で上機嫌だった。突然彼らはシュナップス⁶³やビールの替わり

60 Oberschönau テューリンゲン州の小村。

61 Großer Hermannsberg オーバーシェーナウにある標高 867m の山。

62 Ohmes ヘッセン州。

63 Schnaps 蒸留酒のこと。原料はジャガイモ、サクランボ、ワインの絞り滓などさまざまであるが、一般的にアルコール度数が非常に高い。ワインよりも庶民的な酒である。

にワインを飲んだらどうかと思いついた。しかしそれは、思うほど生やさしいことではなかった。というのも、この土地にはワイン酒場が一軒もなかったからだ。

だが宿の女将の娘には名案があった。この土地には森に覆われた丘が隣接しており、そこにはヴェースブルクという古い城の廃墟があった。当時はまだ部屋がいくつか残っており、かつての栄華を偲ばせていたが、もう長いこと誰も住んではいなかった。それでも真夜中に城壁の内側に明るい光がともるのを見たり、楽しげな騒ぎの音を聞いたりした人は少なくなかった。居酒屋の娘はその城に向かった。間もなく娘は、城の窓がすべて明るく照らされていることに気づいた。彼女が廃墟に着くとすぐに、白い衣装をまとった幽霊じみた老婆が現われ、何が望みなのかと彼女に尋ねた。娘は臆することなく願いを述べた。すると老婆は姿を消したが、少ししてからビンを一杯入れた籠を持って戻ってきた。娘はお礼を述べて、家に戻った。

女将の娘がビンを入れた籠を食卓の上に置いた時、居酒屋に座っていた農夫たちは大いに驚いた。彼らはすぐにビンに手を出した。しかしこの事件によってワインの味に親しんだ頃には、ワインはもう全部なくなってしまった。そこで娘がもう一度廃墟に行ってはみたが、城は闇に包まれており、どの扉も開かなかった。あの老婆も二度と現われなかった。それで娘はワインを手に入れずに戻らねばならなかった。

最後の審判のワイン

昔、リーベンシュタイン⁶⁴の近くにアルトリングエルシュタインとノイリングエルシュタインという二つの城があったが、今では残骸すら残っておらず、城の住人は盗賊騎士であったと伝説が語るのみである。

二つの城はフランケン地方からワインの乏しいテューリンゲン地方へ貴重な飲物を運ぶワイン街道の近くにあったので、城の盗賊騎士たちは自分たちが飲める分量よりもはるかに多くのワインを略奪した。そしてそのワインを恐ろしく大きな丸天井の地下貯蔵庫に保存していた。だが城が崩壊した時、入口の扉も崩れ落ち、地下室は城の瓦礫で覆われてしまった。ついにはワイン樽の板も朽ち果てた。しかしその前に酒石⁶⁵の結晶がまるでクリスタルの薄い膜のようになって、ワインを包み込んでいた。

ワインは最後の審判の日までこのままここにあると言われている。その時には主が最後の晩餐のためにこの貴重なワインを用いるのである。

64 Liebenstein テューリンゲン州。

65 Weinstein ワインに含まれるミネラル分が結晶となったもの。無色透明の結晶で、「ワインのダイヤ」とも呼ばれる。

ブライの三人の酒豪

ブライ⁶⁶では大昔から教会堂の奉獻式の際にはみんな大いに飲んだ。それでもある出来事は、その後長らく語り草となるほど印象的だった。

1300年のこと、リンブルク・アン・デア・ラーン⁶⁷の傭兵隊長フリードリヒ・フォン・ハットシュタインがブライの教会堂奉獻式にやって来た。彼は大変な力持ちとして際立っていた。彼は皆に力を見せつけようと、満杯のオーム樽⁶⁸を高く持ち上げ、樽の注ぎ口からワインを飲んだ。地元の男二人は、これを黙って見ているわけにはいかなかった。言い伝えによると、一人はフェーフ、もう一人はフォン・アルデグントだったという。よそ者がこんな風に地元のことを打ち負かすのは、モーゼルの名誉に反すると二人には思われたのだ。そこで二人はそれぞれワインで満たされた1オーム樽に手をかけ、高く持ち上げて注ぎ口からワインを喉へ流し込んだ。これが延々と続いたのだ！三人の酒豪は代わるがわる樽からワインを飲んだ。一人はマリーエンブルクの女子大修道院長の健康を祈り、もう一人は選帝侯の健康を祈り、そして三人目はドイツ帝国のローマ皇帝の健康を祈って飲んだのである。ところで、どれだけのワインが三人の酒豪の喉を潤したのかは伝えられていない。

修道士たちへの教訓

ある時フルダの領主大修道院長は、修道士たちが作った貴腐ワインの小ビンを一本味わってみた。そのワインは、これまで味わったことがないほど美味だったので、この上等な飲み物をしかるべき量だけ確保しようと、彼はすぐに馬に乗って自らライン河畔へと赴いた。しかしこのワインは、もともと修道士たちに対する罰として考えられたものであったので（「貴腐ワインの誕生」参照）、予想外の結果のせいで芽生えつつある修道士たちの慢心をくじくために、賢明な領主大修道院長はあることを思いついた。

領主大修道院長はまず、修道院の地所をじっくりと検査し、すべてがきちんとしているのを見て満足していると伝えた。それから彼は修道士たち全員を夕食の宴に招いた。食事の後、領主大修道院長は短いスピーチを行った。彼は言った。「ワインは人の心を喜ばせる。親愛なる兄弟たちよ、これは敬虔なダビデ王がおっしゃったことだ。お前たちは神のご加護を得てこのワインを作ることが出来た。その事を祝して飲もうではないか。だが、まず作法通りに祈りを捧げよう。各々、聖務日課書を取り出しなさい……！」

66 Bullay モーゼル河畔のワイン生産地。

67 Limburg an der Lahn ヘッセン州。ライン河の支流ラーン川沿いにある町。旧市街の中心にある広場には、ハットシュタインが樽を頭上に持ち上げ、飲み口からワインを飲んでいる姿をかたどった噴水がある。

68 容量は約150リットル。

修道士たちは怪訝な面持ちで見つめ合った。たしかに彼らは各自その祈祷書を持ってはいた。しかし修道服の中に入れて持ち歩きはせず、部屋に置いたままにして、日曜日や祝祭日に用いるだけだった。領主大修道院長は、修道士たちが決まり悪そうにしているのを見て微笑んで言った。

「おや、お前たちは聖務日課書を身に付けていないのかね？ではやめておこう！」その後、封印されたワインのビンを貯蔵庫管理僧に選んで持ってこさせた領主大修道院長は、自分の服をあちこちさぐって、困りはてたふりをして大声を上げた。「しまった、ラインに来るのには栓抜きを持ってこなくてはいけなかった！しかし誰かわしを救ってくれるのではないかな？」

その言葉が口から出るか出ないかのうちに、周りにいる修道士と同じ数の栓抜きが、彼の目の前に差し出された。領主大修道院長は笑いながら言った。「どうやらここでは祈祷仲間ではなく、飲み仲間にも困まれているらしいな！」だがそれから彼は、全員にワインを注ぐよう命じ、彼らと共にダビデ王の健康を祝して飲んだのである。

水をワインに変えた聖ベンノ

昔、収穫の季節に聖ベンノ⁶⁹がマイセン地方⁷⁰の畑を通っている時、草刈人夫たちの傍らを通りかかった。人夫たちは暑さと重労働で疲れ果てていた。司教は男たちを気の毒に思い、一言も言わずに、彼らの水差しの中の水をワインに変えてやった。草刈人夫たちがそれを飲んでみると、全くうれしいことに器の中身はとても味の良いワインだった。このワインは彼らを元気づけ、力をつけてくれたが、酔っぱらうようなことはなかった。

司教のお供の一人はこの奇蹟に気づいた。彼はご主人にひけを取りたくなかった。一行がまた草刈人夫たちの一団に出会った時、お供は木製の器のひとつを手に取り、人夫たちに向かって言った。「見ていろよ、ご主人様がなさったように、わしが水をワインに変えてやるから！」そして彼は器の上で十字を切った。聖ベンノのために、神様はもう一度この奇蹟を起こしてくださった。この時以来、マイセンのワイン全体がとてもおいしく、きわめて体に良いものになったのだとも語り伝えられている。

69 Benno von Meißen(1010頃～1106)は1066年にマイセン司教に就任。16世紀に聖人に列せられたため、「聖ベンノ」と呼ばれる。

70 Meißen ザクセンワインの生産地であるが、むしろマイセン磁器の町として名高い。

解説

ここに訳出したのは、クリスティーネ・ヴェルナーとディートマー・ヴェルナーの編集による“Die schönsten Sagen vom deutschen Wein” (Husum 社、1999 年刊行)からの抜粋である。二人はドイツ各地の膨大な伝説集からワインにまつわるものを丹念に拾い出し、一冊の本として編集しているが、それぞれの伝説においてワインが果たす役割は実にさまざまである。このように生活のさまざまな場面でワインが登場するのは、それが単なる嗜好品ではなく、確実な現金収入をもたらす重要な商品であったこと、それゆえにワイン作りとは民衆の生活の一部であったことによるのであろう。またワインの伝説に聖職者が多く登場するのは、キリスト教世界では宗教儀式においてキリストの血を意味するワインが必要であること、自給自足を旨とする修道院ではワインも自分たちで生産する必要があったこと、エーベルバッハ修道院のようにワインの生産と販売で豊かな財政を保つところすらあったことなどが、その背景にある。

ワインの原料となるブドウを栽培する畑や山のことを、ここでは「ブドウ畑」あるいは「ブドウ山」と訳したが、ドイツ語では Weinberg、すなわち「ワイン山」という言葉が使われている。比較的寒冷なドイツでは、ワインに適するブドウを栽培するためには、特に日射量の多い場所を選ばねばならず、平地の畑よりも太陽の光を効率よく吸収できる南向きあるいは南西向きの斜面が、その目的に最も適う。その結果、ブドウが丘陵の斜面で栽培されるのが普通であるため、「ワイン山」という表現になるのである。またワイン産地にはライン河、モーゼル川、アール川など、川沿いの丘陵が多いが、これは川からの照り返しが日光不足を補うためと、川から生じる水蒸気が霧となって、「ワイン山」を夜間の気温の変化から守ってくれるからである。

本書ではまず、ワイン山を巡る不思議な話、ワインの名前などの由来を伝える伝説が登場する。次に、かつてワインが生産されていた土地に伝わる話が紹介されている。現在のドイツではワイン生産地として 13 の地区が指定されているが、ワインに関するドイツの伝説には、現在ワイン生産地ではない場所もしばしば登場する。伊藤真人の『新ドイツワイン』にもあるように、15 世紀のドイツのワイン生産地面積は現在のおよそ 3 倍であったといわれるが、それは平均気温が現在よりも 2℃ほど高かったためと、水よりは安全な飲料としてのワインは、品質よりも需要を満たすだけの分量を確保する方が重要であり、そのためドイツのいたるところで、質を問わずにワインが生産されていたからである。本書でも、シレジアのワインのように悪魔も飲めないような酸っぱいワインが登場する。

さらにワイン貯蔵庫 (Weinkeller) にまつわる話がそれに続くが、地下の暗闇にワインが静かに眠る貯蔵庫は人々の想像力を掻き立てるものらしく、殺人事件や幽霊話、さらには古城の廃墟に隠されている秘密の貯蔵庫など、興味深いものが多い。訳者もかつて旧エーベルバッハ修道院

ドイツワイン伝説集

の貯蔵庫を見学したことがあるが、外は 30℃を超える猛暑だというのに、貯蔵庫内部は真の暗闇で冷蔵庫の中のような寒さ、神秘性を感じずにはいられない空間であった。

もちろん本書には酒豪や利き酒名人にまつわる話なども収集されており、ワインに対するドイツ人のこだわりや愛情を感じさせて止まない。

訳出に際しては、主に地名と人名に関して脚註をほどこした。「伝説」というものの常として、どの話も特定の土地が舞台となっているが、なかにはドイツオリジナルのものかどうか、疑問の余地があるものもある。たとえばエーベルバッハ修道院を舞台とした「混じり物の味」は、酒にまつわる各国の伝説やジョーク集などに類似の話が見受けられる。しかしオリジナル性はともかく、ワインの生産で有名であったエーベルバッハ修道院の修道士ならば、このようなこともあったかもしれない、と思わせるだけの説得力がある。ワインをひとつの文化にまで育てたのはフランスであるかもしれないが、ドイツでもやはりワインは単なるアルコール飲料ではなく、文化現象であることをこの伝説集は示していると言えよう。

ワイン関係の用語に関しては、前述の伊藤真人著『新ドイツワイン』を参考にした。またワイン産地の地名確認については、ドイツワイン基金駐日代表部が 2001 年に発行した小冊子 “People and Places in Wine Country” も利用している。

参考文献

新井皓士 『ドイツ・ラインとワインの旅路』東京書籍 1994 年

Heiko Laß Der Rhein : Burgen und Schlösser von Mainz bis Köln, Michael Imhof Verlag, 2005